

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第 8 条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

○氏名	谷端 郷 (たにばた ごお)
○学位の種類	博士 (文学)
○授与番号	甲 第 1063 号
○授与年月日	2015 年 9 月 25 日
○学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 1 項 学位規則第 4 条第 1 項
○学位論文の題名	近代日本の都市における水害被災地域の研究 —1930 年代の京都市・大阪市・神戸市を事例として—
○審査委員	(主査) 高橋 学 (立命館大学文学部教授) 吉越 昭久 (立命館大学文学部特別任用教授) 中谷 友樹 (立命館大学文学部教授)

<論文の内容の要旨>

本博士学位申請論文は、歴史災害研究への地理学からのアプローチの 1 つとして、比較地域論的な視点をもった被災地域研究の方法を提示し、日本における 1930 年代の諸都市の水害を対象に、複数の災害の比較を通して、当該時期の都市水害の時代的・地域的特徴を明らかにしたものである。論文の全体は、以下の 8 章で構成されている。

第 1 章 はじめに

第 2 章 災害を対象とした地理学的研究

第 3 章 研究対象と研究資料

第 4 章 京都市における洪水災害の地域的差異—1935 年京都市大水害の事例—

第 5 章 大阪市における高潮災害の地域的差異—1934 年室戸台風の事例—

第 6 章 神戸市における土砂災害の地域的差異—1938 年阪神大水害の事例—

第 7 章 1930 年代の都市における水害被災地域の特徴

第 8 章 おわりに

第 1 章では、過去の災害の実態解明を通して、防災や減災の教訓を導き出す歴史災害研究の必要性が近年高まっていることが指摘される。また、現在の歴史災害研究では、多様な研究領域からの貢献が期待されるため、個々の研究領域での深化の必要性が説かれている状況を確認し、地理学からこれに応えるべく、3 つの課題を提示した。課題の 1 点目は、

被災地域をより詳細な地域スケールで復原すること、2点目は近年歴史研究への利用が期待されている GIS（地理情報システム）の歴史災害研究への適用を試みること、3点目はこれまで事例研究にとどまることの多かった研究に対して、それらを比較して時代的、地域の特徴を議論すること、である。前二者は個別事例研究を深めるための視点や方法に関わる検討であり、後者は個別事例研究を超えた地理学的な観点からの一般化を試みるための課題である。具体的には 1930 年代に大都市で相次いで発生した 1935 年京都市大水害、1934 年室戸台風による高潮災害、1938 年阪神大水害を対象としている。

既存の都市水害史は第二次世界大戦後を起点に書き始められることが多く、1930 年代の都市水害が都市水害史の中で検討されることはまれであった。日本において急速な近代化を果たした明治時代以降、とくに人口・産業の集中する大都市において急激な都市化が進行した。山麓部や沿岸部においては、市街地化や工場地化が進行したため、豪雨災害や高潮災害などの水害に対してきわめて脆弱な条件を持つに至ったと考えられる。すなわち、都市水害史を考える場合、被害の社会的要因として近代の都市化（市街地の拡大）も合わせて考える必要があり、既存の研究について再考の余地があると考えたのが対象事例の選定理由である。

第 2 章では、主に水害を対象とした地理学的研究のレビューを通じて、第 1 章で提示した諸課題に応えるための研究の枠組みが検討されている。地理学は系統地理学と地誌学に大きく分かれるが、これまでの地理学における災害研究は、系統地理学およびその成果を応用した応用地理学の中で進められてきた。今日の地理学における災害研究は飛躍的に進展しているが、その多くは分析的な研究であり、ともすると災害の全体像を捉える視点を見失いがちであった。しかし、地理学における災害研究のレビューを試みた結果、地誌学的アプローチともいえる被災地域研究の視点が、災害の地理学的研究の中で系統地理学的な研究に並ぶもう 1 つの軸として必要であると学位申請者は強調する。この視点は、個別の災害事例における被害の地域的差異とその要因を分析し、複数の災害事例の結果を相互に比較することで、被災の同時代性や地域性を考察しようとするものである。

第 3 章では、まず、明治中期から昭和初期にかけての日本における水害史を概観した。具体的には水害被害額の推移などを検討し、1930 年代を含む昭和初期に大規模な水害が多発したことを明らかにした。次に、第 4 章から第 6 章で主な分析資料として用いた、自治体刊行の災害誌の資料的価値を再検討し、被災地域を詳細に分析できる可能性を示した。また、災害誌に付された地図は測量された地図上に被災範囲が描かれている場合が多く、GIS を使って定量的な分析を施すことで分析結果の実証性を高められることを指摘した。

第 4 章から第 6 章にかけては、事例分析がまとめられている。第 4 章では、1935 年京都市大水害を事例に、地形や市街地化のような自然的要因と人文社会的要因の両面から GIS を用いて定量的に検討した結果、浸水被害の全体的な傾向としては農地や農業集落の被害が目立つ一方で、局地的には様々な都市水害の様相がみられたことを明らかにした。第 5 章では、1934 年の室戸台風の大阪市を事例に、江戸時代の干拓地や明治時代以降の埋立地

で被害が大きかっただけでなく、局地的に様々な要因によって被害が甚大となったことを明らかにした。とくに此花区のあたりの被害の激化には、地形条件だけでなく、これまで実証的に示されてこなかった地盤沈下の影響もデータによって示している。第 6 章では、1938 年阪神大水害の神戸市を事例に、複数葉にまたがっていた災害地図を統合し、これまで着目されてこなかった家屋被害分布の詳細とその要因を検討した。その結果、地形に合わせて被害の特徴に差がみられたことを明らかにした。

第 7 章では、京都市、大阪市、神戸市の 3 都市の比較を通して見出された共通点や相違点から、1930 年代の都市水害の時代的・地域の特徴を考察している。その際、水谷武司や James K. Mitchell のモデルを参考に、それぞれの災害事例の分析結果を検討した。その結果、1930 年代の都市水害は、開発が優先され防災対策が疎かにされるなど近代社会から現代社会への移行期であるがゆえの不安定性も併せもちながら、沿岸部や山麓部など水害に対して脆弱な地域へ市街地が拡大した結果、発生したものであることが明らかとなった。この状況は第二次世界大戦後の水害の特徴と類似し、現代的な都市水害と同様な災害発生の構造が、1930 年代からみられたということの意味する。そして、現代的な都市水害は、高度経済成長期に抱え込んだ諸矛盾が原因となって新たに発生したものというよりも、1930 年代頃から時代ごとの都市化の特徴に合わせて、ホットスポットが転移してきたと捉える新たな近現代都市水害史像を提示した。

第 8 章では本稿のまとめと今後の課題が示されている。第 1 章で挙げた課題ごとに整理すると以下のようにまとめられる。まず 1 点目の課題については、被災地域内をより詳細な地域スケールで検討することで、地形や市街地化のような微細な被害程度の地域的要因を分析・考察することができ、個別事例研究の深化に貢献できることを示した。また、被災地域内を類型化することは、各事例研究を比較する際の基礎的な作業としても位置づけることができた。2 点目は、各事例研究を通して、歴史災害研究への GIS 利用の有効性が示された。たとえば、面積計算とその集計によって水害被災地域の特徴を定量的に分析し、先行研究の成果ともほぼ合致する結果が得られた。この点も歴史災害研究における GIS 利用の意義を高めるものであったと考えられる。3 点目は、これまで個別事例研究に終始することの多かった歴史災害研究に対して時代的・地域の特徴を考察する方策として、比較地域論的な視点をもった被災地域研究の方法を示した。そして、その方法によって 1930 年代に相次いだ大規模都市水害について時代性や地域性を考察し、新たな都市水害史像を示すことができた。これら方法は、他都市の災害事例にも適用可能であり、第二次世界大戦後の枕崎台風による呉市の土砂災害や伊勢湾台風による名古屋市の高潮災害などを再検討し、1930 年代の諸都市の災害との比較を行っていくことなどが、今後の課題として挙げられている。

<論文審査の結果の要旨>

これまでの日本の大都市における水害研究は、第二次世界大戦後を起点に進められること

が多かったが、学位申請者はそれでは見過ごされてしまう都市水害の歴史的経緯を理解する必要性を指摘した。すなわち、現代日本の大都市で発生する水害の背景に日本の近代化以降に発生する都市化の進展と脆弱性の増大を指摘する。そこで、1930年代に発生した京都・大阪・神戸の水害を、最初期の本格的な水害と位置づけて、近代化に伴う都市化と都市水害の発生の関係を明らかにすることを目的に研究を行った。その結果、都市水害の歴史的位相を都市化にともなうホットスポットの移転現象として理解する新しい結果を提示した。この点は、これまでの研究にはない独自の成果であり、高く評価される。学位申請者は、発生してから既に80年以上経過した過去の災害を対象にして、歴史GIS（地理情報システム）の手法を取り入れることで、当時の「災害誌」の図面記録から被災場所の地理的な計測を実施し、水害被害の集中する地形区分と都市化が進行する地域との関係を明らかにした。これまでとかく定性的な論述に終始していた歴史災害をGISの導入することで、定量的に分析することが可能になり、分析の実証性を高めたことが指摘できる。

さらに、本論文で取り上げた京都市、大阪市、神戸市の災害研究を単なる事例研究にとどまらずにMitchellのモデルをベースとして、学位申請者独自の工夫を加え、災害の比較地誌学的手法へと一般化する作業に成功しており、この結果は今後様々な場面で応用が期待される。

この事例研究の一般化に向けた作業の成果として、都市化の進行とともに、より水害の危険性の高い領域へと市街地が拡大し、時代に応じて水害被害が集中する地形区分が変遷している状況を明らかにして、それを「水害ホットスポット」と整理したことは、歴史地理学のアプローチによる災害研究として、歴史GIS手法の導入に関する意義とともに、日本の大都市型水害の歴史的経緯を総括している点でも有意義であり、博士論文に値する成果を示しているものと判断できる。

ところで、学位申請者は歴史災害を防災計画に活かすことを目標の一つとしているが、都市の社会的バックグラウンドとしての脆弱性や、地形的脆弱性については論及しているものの、それを防災計画に活かすプランにまでは至っていない。この点は、今後、研究を進めるにあたり大きな課題になるといえよう。

また、本論文がまとめられる際、先学の文献レビューにあたり、災害研究が理工学分野、社会科学分野、人文学分野など多岐に渡るために、それらを見通す学位申請者の視点が明確にされなければならない。外国語文献も含め、多岐に渡る文献のレビューの枠組みを明瞭に提示することが、今後の研究の進展に重要であろう。後に続く後輩のためにもそれを期待したい。

専門用語などの定義が必ずしも適当でないと思われる部分もみられる。「歴史災害」と「災害史」、「地誌」と「地誌学」の区別など、基幹的な用語・概念を明瞭に定義することで、理論の展開に違和感をもたれないようにする細心の注意が必要である。学部時代に地理学を専攻せず、大学院になってから学位申請するまで到達した努力は多とするものの、さらに一層の研鑽を望みたい。歴史時代の現象を扱う上で自治体作成の「災害誌」と言われる

ものの資料（史料）批判については、本論の根本に関わる重要な問題であり、頁を割いて十分に検討した手順を読者にみせる必要があると考えられる。

さて、本論文の主軸をなす第4章～第6章は、既にレフェリーつきの学術誌などに掲載された内容を基にしており、究極なまでに無駄を省いた構成になっている。しかし、学位申請論文としては、必要欠くべからざる基礎的図表を追加し、より読者の理解を促進する工夫がされてもよかつたのではなかろうか。特に、話題となる被災場所だけではなく、その背景となる集水域の地質、地形、気象に目配りをし、3次元、あるいは時間ファクターを加えた4次元での検討も必要である。さらに、被災場所では人口だけではなく、社会構造、産業、防災施設や組織などまで検討することで「災害誌」を標榜する学位申請者の立場がより確固としたものになると思われる。そして、最後にまとめられた「災害モデル」は、参考とした水谷のモデルやMitchellのモデルから、既に学位申請者の谷端のモデルとして昇華されており、今後、谷端モデルをよりよいものに仕上げていただきたい。

提出された学位申請論文は個々に地理学、地誌学、歴史地理学、自然地理学、歴史学、災害論などそれぞれの分野からは、軽微な問題点を指摘することができるが、申請者が目指した都市災害を第二次世界大戦後からではなく、1930年代まで遡り、京都市、大阪市、神戸市を取り上げ、GISを用いてより細かなところまで立ち入って定量的に水害の構造を明らかにしようと試みた点は高く評価できる。そして、学位申請者が審査にあたり、今後の研究の展望として述べた、GISを用いて各地の都市の歴史災害の様相を明らかにし、今後の防災対策に活かして行こうとする意思を、ぜひ実現してほしいと考える。

以上の点を総合的に判断して、審査委員会は一致して、本論文は博士学位を授与するに相応しいものと判断した。

<試験または学力確認の結果の要旨>

本論文の公開審査は2015年6月16日（火曜日）17時から19時30分まで、至徳館304西会議室で行われた。審査委員会は、本学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程の在学期間中における、国際学会や全国学会になどにおける発表、論文作成に当たり参考にした外国語論文、学会誌の英文要旨など様々な研究活動、また公開審査の質疑応答を通して博士学位に相応しい能力を有することを確認した。

以上の点を総合的に判断して、審査委員会は申請者に対して、本学学位規程第18条第1項に基づいて、「博士（文学 立命館大学）」の学位を授与することが適当であると判断した。